

Origami Tanteidan Newsletter 折紙探偵団新聞

42号

式百年



第六回・道は険しくの後編

「折り紙は不切正方1枚でなければならない」と、よくいわれます。今回は、この主張について考えてみます。

その前に、前回の議論を思い出しておきましょう。3弁のあやめを折ろうと思ったら、三角錐の側面の形をした紙を使えばよかったのです。もし、折り紙の必要条件の一つに「不切正方1枚」があるとしたら、3弁のあやめは折り紙ではないことになります。

しかし、「三角錐の側面の形をした紙」を不切正方1枚で折ることができて、それゆえ、3弁のあやめも不切正方1枚から折ることができます。すると、3弁のあやめは折り紙ということになります。

ろが、どちらの選択肢を選んでも、問題が生じます。

まず、後者の立場について考えてみましょう。この場合、「折り紙は不切正方1枚でなければならない」という条件は、その見かけとは裏腹に、とても弱いものになります。例えば、ロ

力を強くすることができます。

しかし、今度は強すぎるのです。これでは、あまりに多くを排除してしまいます。一般に不切正方1枚だと思われている作品のすべてが、本当に正方形のすべてを無駄なく使っているわけではありません。前川淳の『悪魔』にさえ、わずかですが無駄な部分があります(図2)。このような無駄な部分を全く許さないとしたら、不切正方1枚である作品は本当に少なくなります。



折り紙批評に向けて「折り紙は不切正方1枚でなければならない」といったとき、「不切正方1枚」の規準が問われなければなりません。ある作品が不切正方1枚であるかどうかは、形式的に決まるものではなく、解釈する人による程度の差が入り込む余地があります。

そうであるならば、私たちは第3の選択肢をとるべきでしょう。すな

わち、「牛」が折り紙であるかどうかは、それが不切正方1枚であるかどうかとは別の規準によって決められるべきだという立場です。

一般に、折り紙について議論するとき、それが形

式的に不切正方1枚の規準を満たしているかどうかはあまり意味がありません。それぞれの作品について、どんな紙を使い、どのように折って、どのようなものになるか、総合した判断を下す必要があります。私たちは、個々の作品の「内容」にいちいち入ってゆかなければなりません。そして、この点こそ折り紙批評の生まれる余地があるのです。

ご意見、ご感想、ご質問、ご反論等どしどしお寄せ下さい。

「牛」と不切正方1枚

もう1つ似た例を出しましょう。図1は、内山興正の「牛」の展開図です。この作品の折り図は「をる」の第15号に掲載されていて、それによると不切正方1枚になっています。ところが、展開図からお分かりの通り、すべてのカドは1対2の長方形の中から折り出されています。折り図では最初に観音折りをしているのですが、この操作は全く余計で、単に紙を重ねて折りにくくしているだけです。さて、この「牛」は折り紙なのでしょうか。

ここで、少なくとも2つの選択肢があります。第1に、「牛」は本来不切正方1枚ではないので、折り紙ではないとする立場。第2に、「牛」は不切正方1枚であるので、折り紙であるという立場です。とこ

ろが、どちらの選択肢を選んでも、問題が生じます。まず、後者の立場について考えてみましょう。この場合、「折り紙は不切正方1枚でなければならない」という条件は、その見かけとは裏腹に、とても弱いものになります。例えば、ロ

力を強くすることができます。

しかし、今度は強すぎるのです。これでは、あまりに多くを許容してしまいます。これでは、なかなか意味のある主張をした気にはなりません。そこで、第1の選択肢を選びたい気がしてきます。「不切正方1枚」には、文字どおりの意味の他に、例えば「形をつくるのに貢献していない部分は除いて考える」という条件が含まれていると考えることができます。こうすれば、主張の威

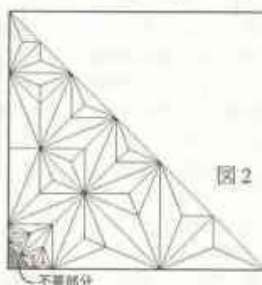
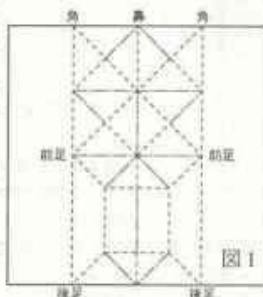


図2



折紙時評

まえかわ じゅん Jun Maekawa

前川 淳

第2回
星を求めて

■年明けから「くる」、折り紙の科学会議、南牧村の講習会、探偵団など、折り紙が忙しい。

吉野君が逝ってからは半年、2月23日には彼を偲ぶ会が計画されている。今回の「折紙時評」は、「時評」ということからはすこし外れるが、吉野君の「作品」の復元を考えてみる。そしてさらに、その復元を通して、「よりよいユニット作品とはなにか」という問題にも触れてみることにしたい。

さて、その「作品」であるが、これは吉野君自身が一度も折ったことのないものである。「どういうことだ?」と思われるのも無理はない。要するに、それは折り紙の作品ではない。探偵団ホームページのアイコン(絵文字)として使われている、彼のデザインによる多面体である(図1)。



「よくあるユニットの星の頂点を引っ張って伸ばしたんだ」と、彼は言っていた。「よくあるユニットの星」とは、例えば、蘭部光伸さんの「カラーボックス」の12枚組であろう。切手の図案にも使われている現代の古典である(図2)。

この「蘭部星」は1辺が直角2等辺3角形だが、これを正3角形にまで引き伸ばすと、いわゆる「ケプラーの多面体」と呼ばれるものになる。しかし、その場合、3角錐の稜が1直線に並ぶはずだが、「吉野星」はそうならない。3角錐は、より鋭角的である。わかりやすい角度をとって、それを45度とすることにする。実際、その角度と見てほぼ間違



いはない。もうひとつ、これは2次的な特徴だが、「吉野星」の各々の3角形の面が、スリットのないスムーズなものになっているということもある。

目標とする立体の特徴が見えてきた。これを現実に折り紙作品とすることになるわけだが、ここで一旦話を一般的にして、ユニット折り紙を評価する条件を考えてみる。

まずは、(1)「それぞれの部品が単純な私たちの紙から切り込みを使わずにつくられている」ことがある。言わずと知れた折り紙の基本だが、ユニット折り紙の場合、さらに次のような条件が加わる。(2)「糊なしでも組むことができる」(3)「ひとつひとつは単純で折りやすい」などである。(4)「すべての部品が同じかたちである」という条件も考えられる。これには同意しないひともあるかもしれないが、「単純なものから思いもかけないかたちが組み上がる」とは、ユニット折り紙の醍醐味のひとつで、その「単純さ」には「各部品が同じかたちである」とも含まれていると言っ

てよいと思う。誤解のないように付言しておくが、上記の条件を、一部、あるいはすべて破ってしまっているものがあるにもかかわらず、それが面白いこともある。ただ、(2)の「糊なし」はそう簡単には外せない条件である。紙の組み合わせの妙味は、ユニット折り紙

の肝所である。例えば、トム・ハルさんの籠状ユニットは、糊付けいっさいなしで直径が1mを超える球状のかたちを組むことができるが、そのことだけでも、わたしのなかのその作品の評価が何倍にもなっている。

以上のようなことを頭の隅に置きつつ折ったのが、図3である。12枚組で一応目標のかたちをつくることができるが、組上がりに若干脆弱なところがある。また、吉野君の図と違い、隣り合う3角形が同じ色になってしまふ欠点がある。(5)「配色に自由度がある。あるいは、配色が高い対称性を持っている」ことも、ユニット折り紙の大きな魅力のひとつである。

その点を一部改良したのが図4だ。展開図はやや複雑に見えるが、折りの工程は離しくない。表裏を使って3角錐毎の色分けもでき、組み上がりもそこそこしっかりしている。



ただ、色分けに紙の表裏を使っているための問題がある。市販されている折り紙用紙では、相応しい色の紙がなく、吉野君の描いた色分けの再現ができないのである。

というところで、紙幅も尽きた。この記事は、インターネットのホームページと連携して、さらに展開させる予定である。腕に自信のあるひとは、「吉野星」に是非挑戦してほしい。布施さん、橋高さん、川村さん、どうですか?

岡村昌夫

第29回

おりがみ庵

おかむら まさお Masao Okamura

■ついに『千羽鶴折形』200周年の記念すべき時がきた。



【足で鶴を折る】

推理作家の佐野洋氏は足の指で鶴を折るのだそうである。両手が不自由な人が何でも足でやってしまうことはよくあるが、足を使っているいろいろなことをして見せる「足芸」という演芸は、現代でもわずかに残っていて、台の上で横になって両足で物をぐるぐる回したりするが、折り紙を折ったりはしない。ところが、江戸時代の足芸はまさに折り紙を折って見せたのである。

高木智氏が「古典にみる折り紙」で紹介されたのでご存じだと思うが、文化文政期に大評判となった岩本梅吉という身長54センチの矮人が、足で折り紙を折っている。この人は、いろいろな足芸をやり、中でも手で紙切りを、同時に足で折り紙を折って見せるという芸で大当りを取ったものらしい。ただ、この梅吉の場合は、矮人であることがいかにも陰湿な見世物的であって、あまり良い印象は残らない。

【早咲小梅という足芸人】

天保年間、1830年代の終わりが、桑名で魯縞庵が亡くなって間もなくのころのことであるが、江戸で「早咲小梅」と名乗る足芸人が大坂からやってきて興行したそうだ。「小梅」と言うのは「梅吉」を意識した芸名だと思われる。30歳位の女性で、小娘のように化粧して、「足にて種々の技芸をなす。琴・三味・雜物・花をいけ、紙にて折りかた、さまざまの紋を切り、楊弓を射、投扇興といふ事迄も人に見す。」要するに当時の女性が習う遊芸のたぐいを何でも足でやって見せたのである。これを直接に見て、このように記録に留めたのは、有名な『嬉遊笑覧』の著者喜多村信節である。彼が60歳ごろに書いた随筆『日本随筆大成第2期第4巻』所収「崎

庭雑考」天保14年自序に絵入りで詳しく述べているのだ。彼は「信節(のぶよ)」また「節信(せっしん)」という。本当は「信節」なのだが、銅印を作ってくれた人が間違えて彫ってしまい、作り直すというのを無理に請い受けて、そのまま逆でもよいことにしてしまったという。なんとも楽しい御仁である。大変博学な記録マニアで、質の高い考証随筆を残した。『嬉遊笑覧』を完成させてから何年か後のこと、彼は早咲小梅を見て、早速考証癖を発揮して古書を博覧し、人の言を引用して、微に入り細を穿つ。昔から足芸はいろいろ有ったのである。不思議なことに岩本梅吉の話は出てこないで、「山鳥金太夫」という男の足芸人が正徳のころに居たことを、当時の絵双六から絵を写して実証的に記録している。



【ひとしおの趣あり】

面白いことには、古く慶長のころの屏風絵にある四条河原の見世物の女足芸人と、実際に自分が見た天保の足芸人を比較して、極めてリアルに説明した部分がある。慶長の女芸人は袴を着ていたというのである。それを「さもあるべきことなり」と書く。しかし「この頃の足芸は、袴などは着ず、……下に紅の長襦袢を着た

り。其衣服のまへを掻きあはせなどするも、一しほの趣あり」というのだ



から笑わせられるではないか。図は、天保7、8年ごろの見世物の看板から信節が写したのものによっている。いかにも江戸時代らしい風情がある。折り鶴が処女の象徴として描かれることが多いと高木氏が指摘しておられるが、この図もそのムードで見なければいけないのだろう。佐野洋氏はどんな格好で折るのだろうか。いづれにしても、失礼ながら、ひとしおの趣も何もあったものではないだろう。

【前回の補遺】

原稿の段階で北條高史君に教えられて気付いたので、早速直しておいたのだが、フロppyの悲しさ、手違いもあってもとのまま印刷されてしまった。以下に追加訂正したい。

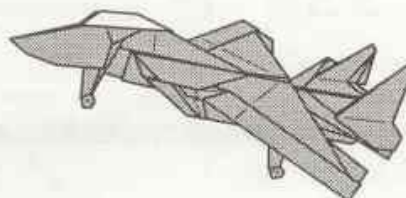
実は、香港から送られてきた「伝承の蛙」は、吉沢章作の「ケロケロかえる」(をる9号)と全く同じであった。香港折り紙協会会長の陳超顕さん(「超さん」と書いてしまっただけ失礼しました)。伝承と創作が一致することは絶対にとは言えないので、あなたが伝承だと思った理由がもしあったら知らせてください。お願いします。

F-15 イーグル

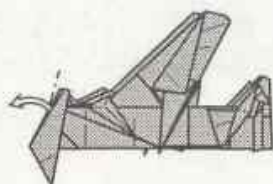
第3回 (完結編) F-15 Eagle

吉野一生 Issei Yoshino

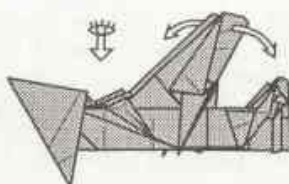
トレース: 木村良寿



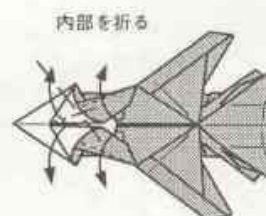
(97) 中身を
引き出す



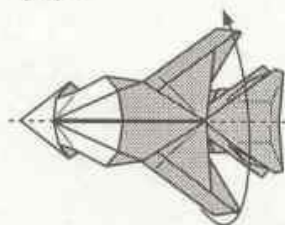
(98) 左右に
少し開く



(99) 上から見た図

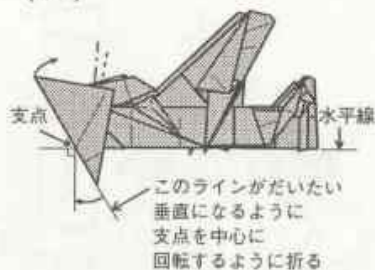


(99)-2



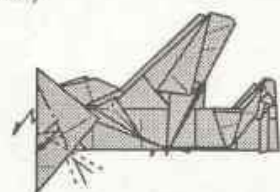
また半分に折る

(100)



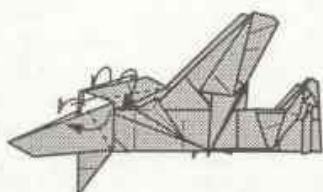
このラインがだいたい
垂直になるように
支点を中心に
回転するように折る

(101)

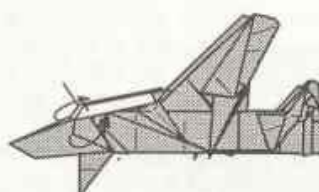


中わり折りと
かぶせ折りの組み合わせ

(102) 左右両方向



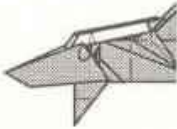
(103)



(104) 中わり折り



(105)

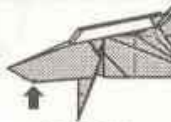


角を中に入れる

(106)

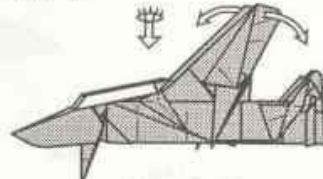


(107)



角の部分を
少し押し込み
丸みを付ける

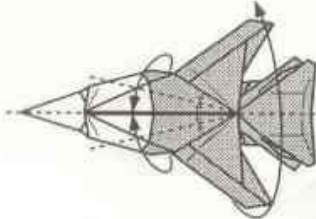
(108)



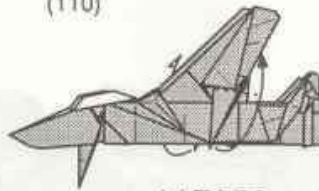
左右に少し開いて
上から見る

(109)

内部を折ったら
また半分に折る

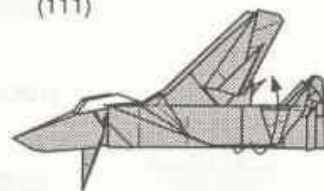


(110)

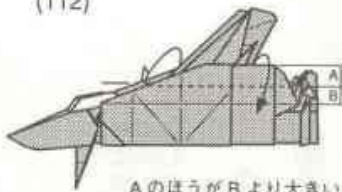


左右両方行う

(111)

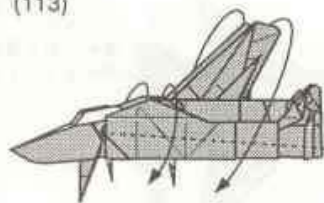


(112)



AのほうがBより大きい

(113)



この辺りの折りは紙も
かたく大変ですが
最終的にのり付けで形を
整えるので各部が少し
開いた状態でもかまいません

(114)



正面から見る

(115)



主翼を水平に開く

(116)



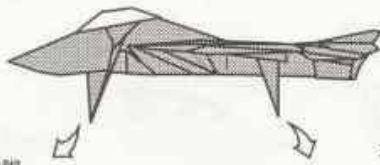
主脚と胴体を
立体的に仕上げる

(117)



横から見る

(118)



前脚

主脚（左右両方行う）

(119)



(120)



(121)



(122)



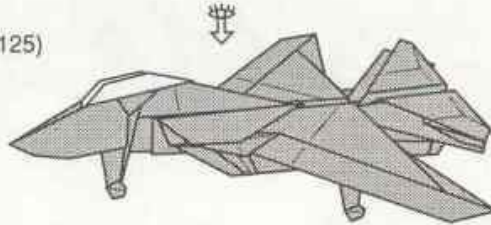
(123)



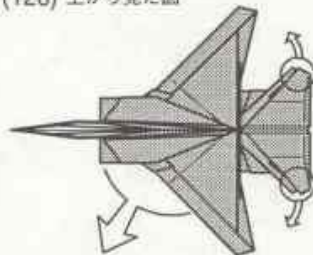
(124)



(125)

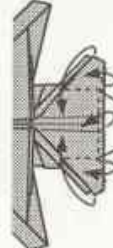


(126) 上から見た図



左右をつまんで
ひっぱり
中心の折り目を
開くようにする

(127)



垂直尾翼を
直角に立て
(93)で折った
折り目に沿って折る

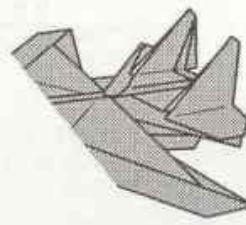
(129)



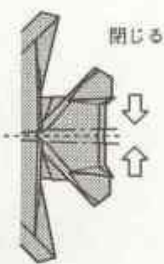
(129)-2



(128)-2



(128)

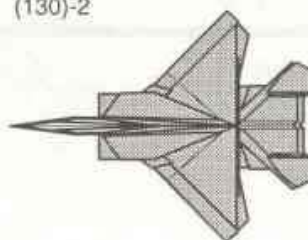


閉じる

(130) この折り目は
開いてしまうので
後でのり付けする



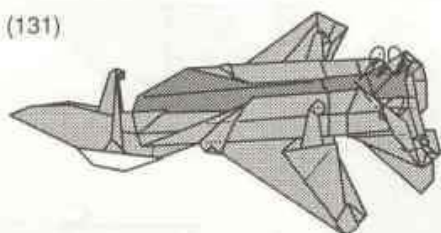
(130)-2



ひっくり返して
腹側を見せる



(131)

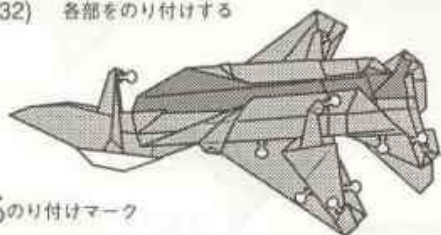


(131)-2



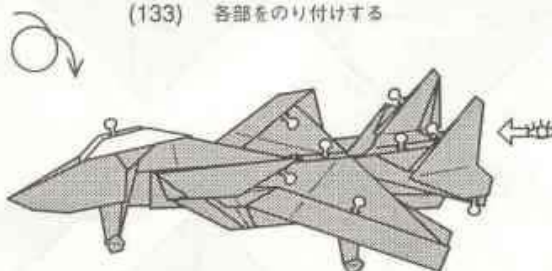
ひし形に折れた
部分をひっくり返し
その折り目をもっと
奥まで延長する

(132) 各部をのり付けする



のり付けマーク

(133) 各部をのり付けする

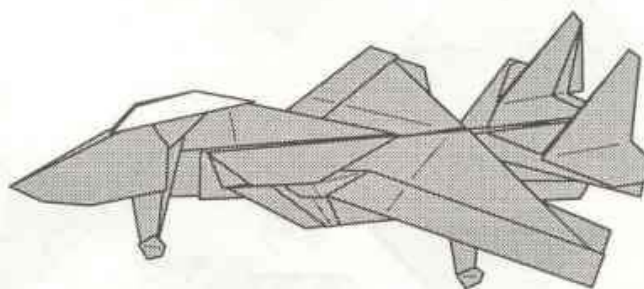


(134) 後ろから見た図

排気口をつくる



(134)-2



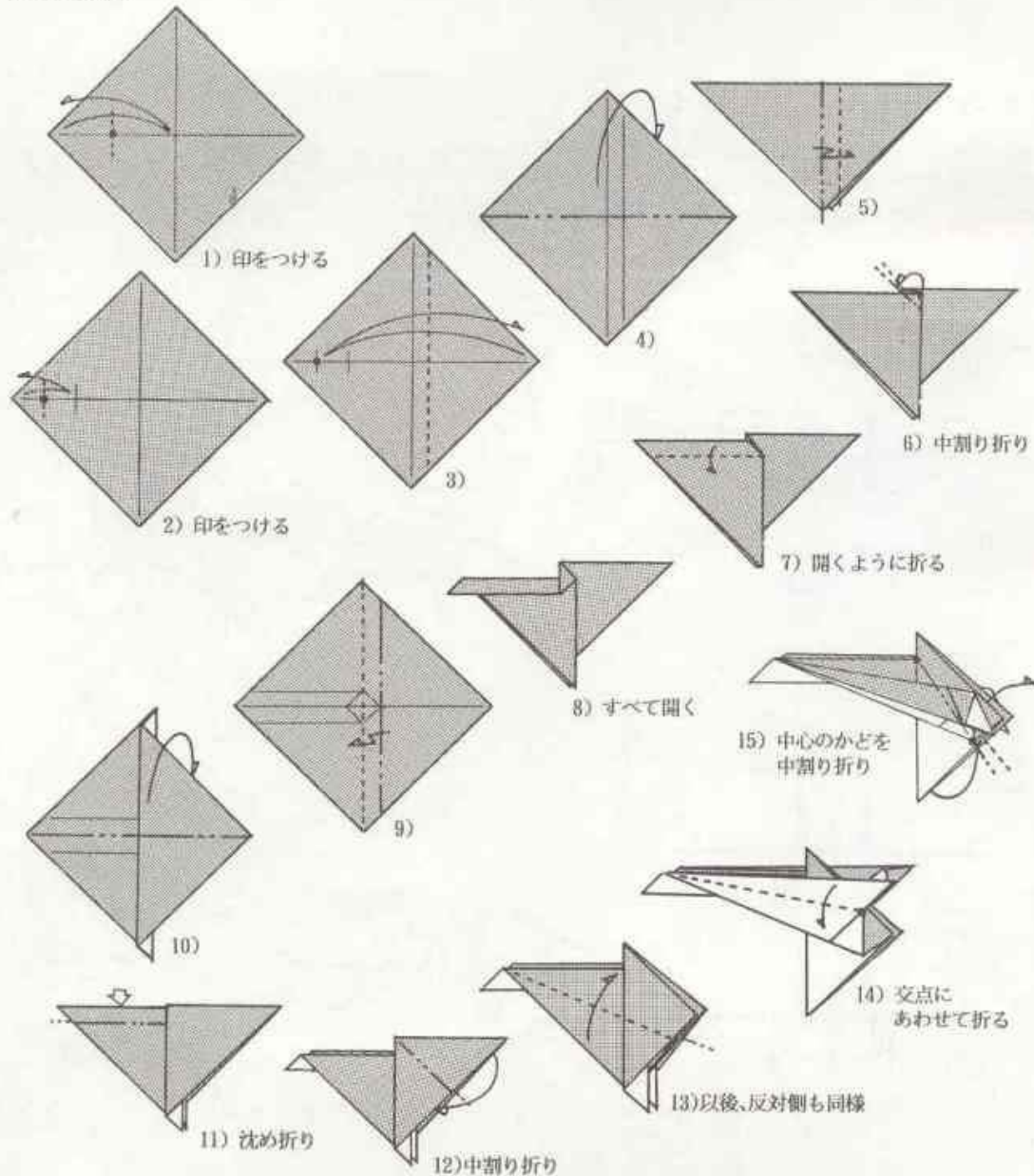
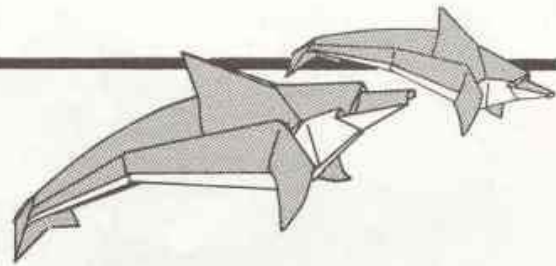
(135) 出来上がり

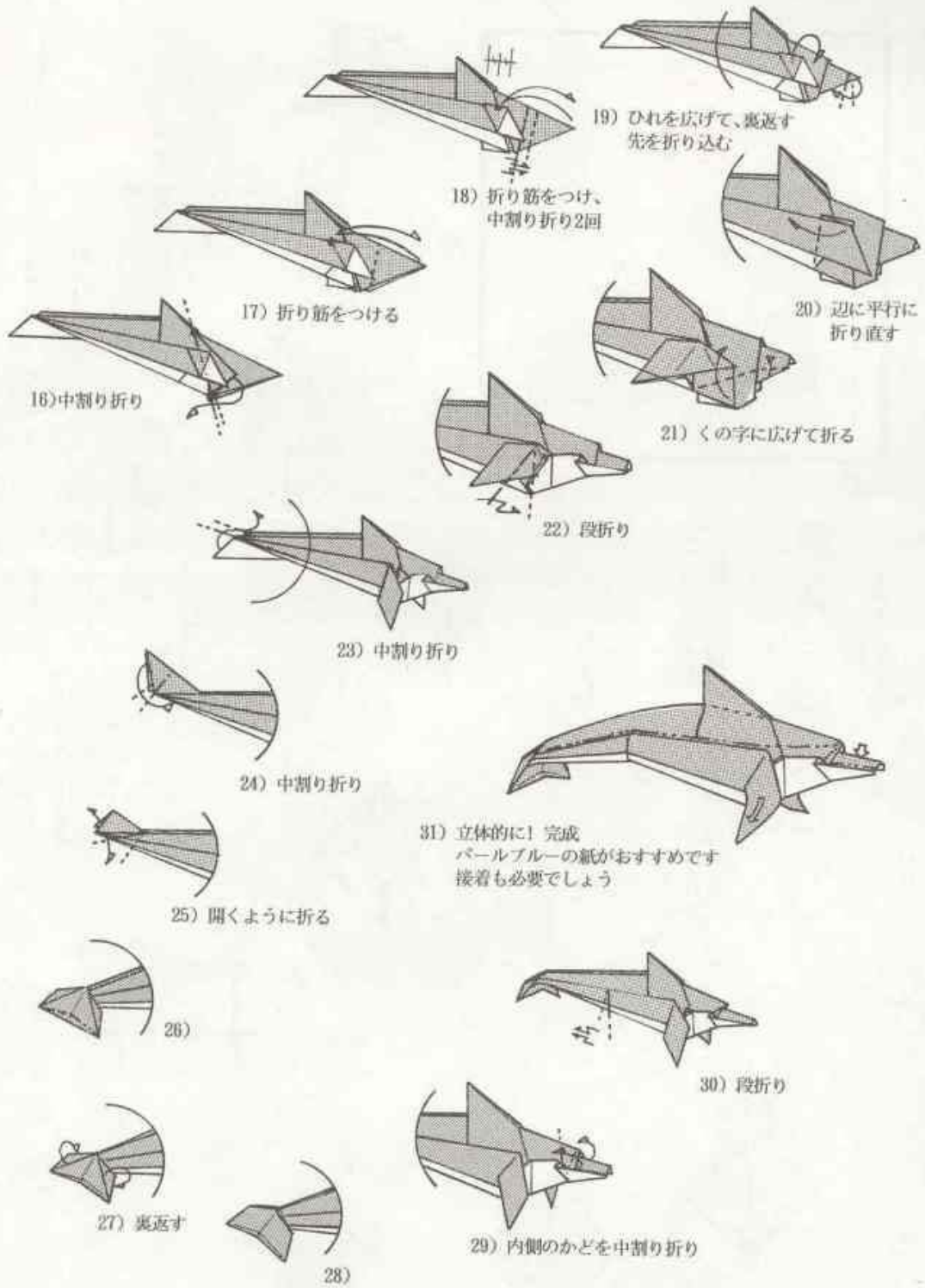
イルカ

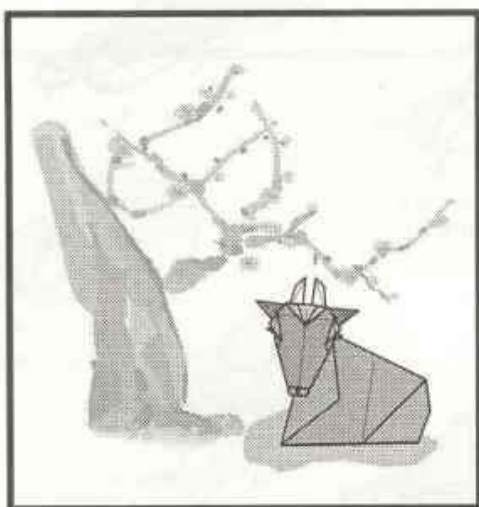
TVのシークエストに登場する
イルカを見ながら紙をいじって
いて、思いついた作品です。

創作 1996/7/16

山梨雅弘





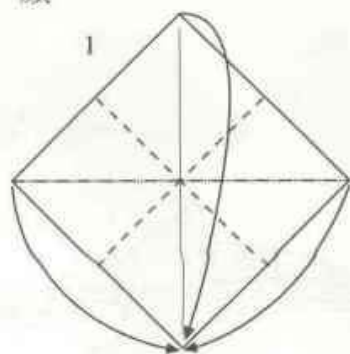


顔

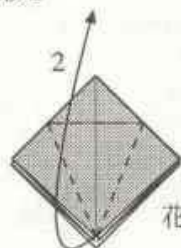
丑

作 土戸 英二

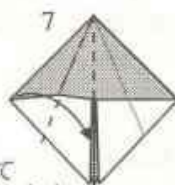
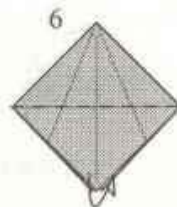
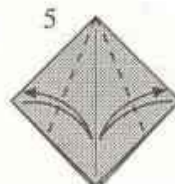
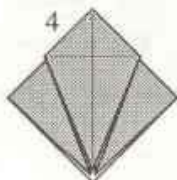
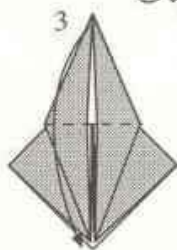
97.1.1
97.1.3



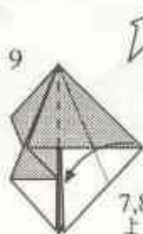
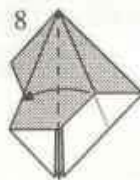
正方基本形をつくる



花卉折り



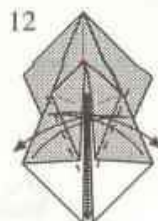
開いて
つぶします

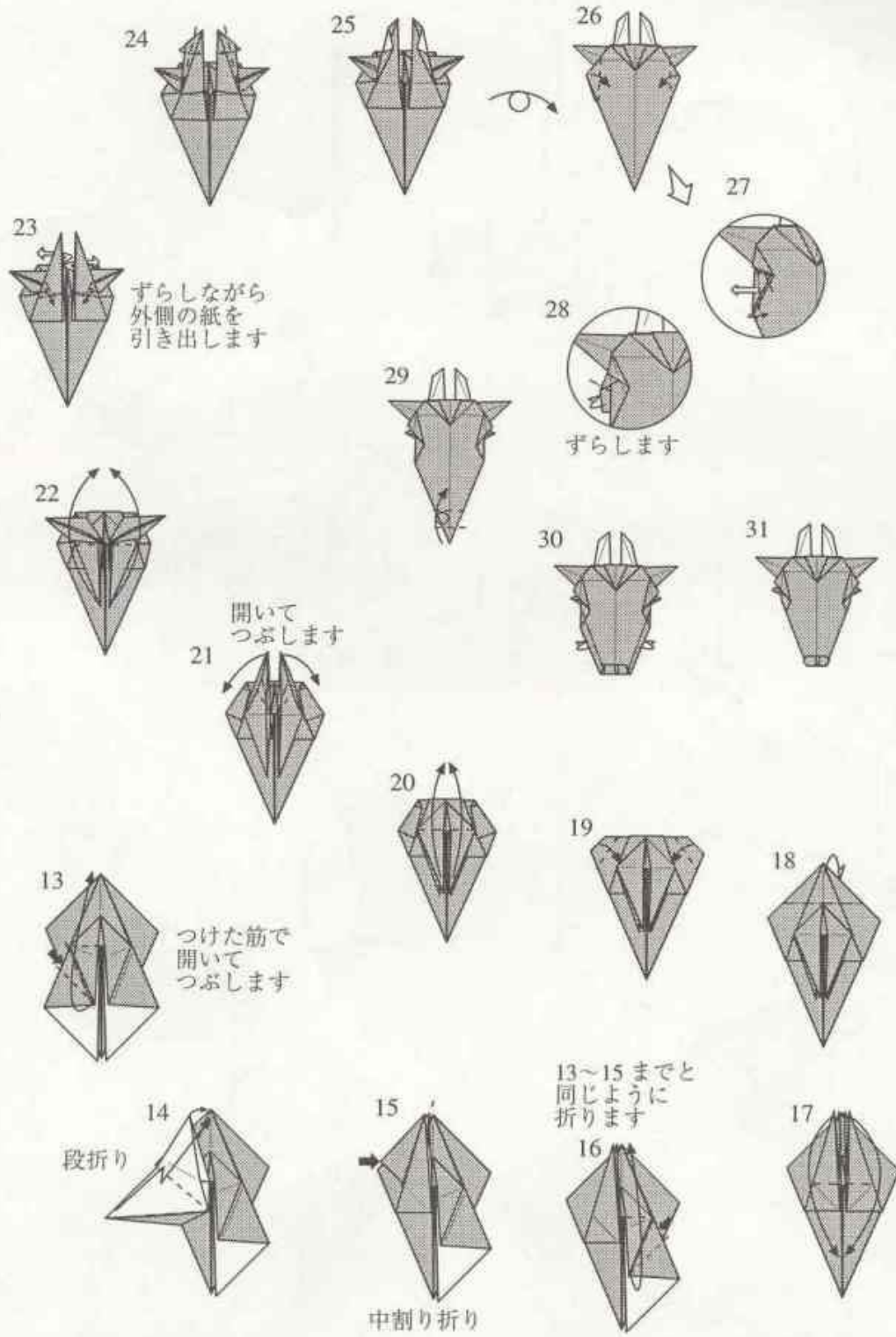


7,8と同じ
ように
折ります

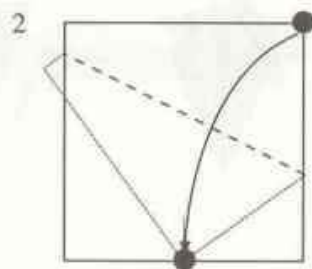
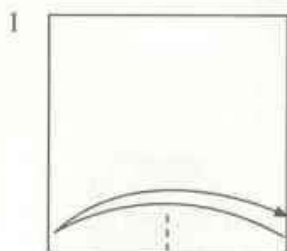


つけた筋で内側を
開いてつぶします

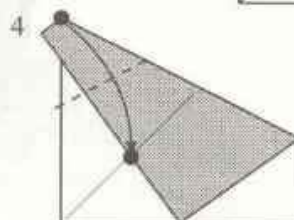
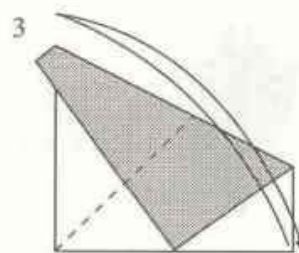




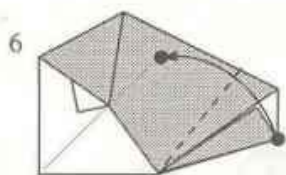
体



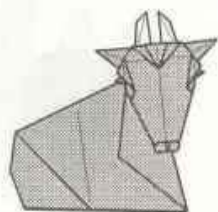
●と●とを合わせます



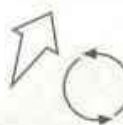
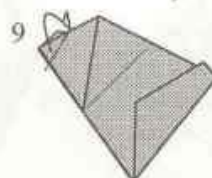
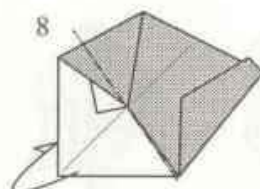
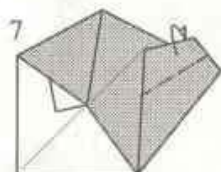
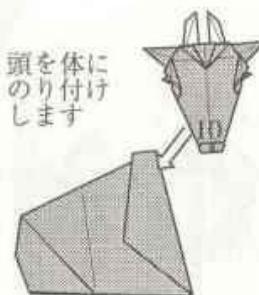
●と●とを合わせます



●と●とを合わせます



頭を体
にのり
付け
します



川崎敏和の「折紙探偵団」 インターネット便り



Netscape

見る 進む ホーム 再読み込み 送信 開く 印刷 検索 中止

ジャンプ <http://www.ask.or.jp/~origami/t/~/Media/BBS/index.html>

新着情報 おすすめ **ハンドブック** ネット検索 ネットディレクトリ ソフトウェア

第2回電子時間差 井戸端会議

人が集まり他愛もない話に花を咲かせるのが井戸端会議ですが、インターネットを利用すると、いつ井戸に行っても話の輪に入ることができます。もちろん井戸とはパソコンのことです。一例を紹介しましょう。話は海外研修ではりきる京都の新本氏からの相談に始まります。

◆(66)東南アジアでうける折紙は？(7/8) by 京都の新本：コンベンションで入団しました新本です7/17～7/22までインドネシアの幼稚園視察に行きます。そこで折紙を教えないければならなくなりました。さて問題です。なにを折ればうけるでしょうか？どなたか知恵を貸してください・・・

《これを読んだ前川氏は、「ブラジルでの講習経験のある俺が指導してやるか。」とキーを叩く。》

◆(68)インドネシアで(7/9) by 前川：インドネシアで折紙を教えるには？インドネシアはイスラム国です。そうすると、犬と豚は、折紙紙であっても禁物です。その他は、具象物でも何も問題なかったと、中東で折紙を教えた吉野さんが言っていました。幼稚園となると、竹川青良さんなどの「遊べる折紙、動く折紙」がやはり定番だと思います。くれぐれも、

「アーミーナイフ」などはやらないように。(やるわけはない)



《新本氏はインドネシアで前川氏の威光を背にやりたい放題。そして帰国。》

◆(91)インドネシア無事終了(8/1) by 京都の新本：おかげさまでインドネシアの幼稚園訪問は無事終わりました。いろいろ折って結局「キツネの面」が一番喜ばれたみたいです。いろいろと折紙を持っていたのですが一番子供に人気があったのが宮島さんの「ハエ」で一番怖がられたのが前川さんの「悪魔」でした。その差はどこにあるのか・・・話しはがらっと変わりますが、帰りのシンガポール空港で金の置物を売っている店に行くと、何と金の折紙細工が20点ぐらいおいでありました。もちろん「折り鶴」もありました。(で

も80ドルもしたので買えませんが、シンガポール空港に行ったらぜひ見てみてください。《この金の折り鶴情報にすばやく反応したのは意外にも中西氏。》

◆(92)金の折り鶴(8/2) by Na：京都の新本さん、お帰りなさい。ご無事そうで何よりでした。金の折り鶴、例え80ドルでも、是非買ってこられるべきだったかも。このBBS《団員自由掲示板のこと》を読んでいるとある方なら200ドルでも買ってくれたんじゃないでしょうか？ねえ、前川さん？

◆(93)金の折り鶴(8/3) by 前川淳：「200ドルでも買う」って。うーん。ほんとうに買いそうだからこわい。最近手にいれた折り鶴モノは、絹のスカーフ。これは、ネクタイにする予定。コンベンションでわたしの教室に参加してくれた逆瀬川さんからも、なにか「それらしいもの」が届いてるらしい。山梨・長野に長期滞在中で東京の家に帰っていないので詳しくは分からない。

《地球上のどこからでもこのような話の輪に加わることができます。でも私が発信した話題にはほとんど反応がありません。きっと九州の田舎者だから相手にされないんだ。でも佐世保は人がよいええ魚が安くて旨いからいいもん！》

又巻完了。



1997年は、「秘伝・千羽鶴折形」出版200年の記念の年になります。コンベンションでも記念のイベントを企画中。

折ったもんがず!

西暦2500年の日記



12月19日にNHKで放映された「オトナの遊び時間」はご覧になりましたか? 「をる」誌上でお馴染みの松尾貴史さんをゲストに迎え、コアでディープな折り紙の世界を紹介しようという趣旨の番組でしたが、我々が折紙探偵団もすっかり出演させていただきました(正味5分でしたが)。「こんな変わったことをやっている大人達がいます」という導入部分は予想通りでした...

最初の取材は、例会の行われた11月30日。ここでは「ビョンビョンガエル選手権」なるものが行われました。その場で突然言われたため、一同四苦八苦。多くの方が折り方を知りませんでした。優勝したのは、禁断の座布団折りを恥ずかしげもなく使った岡村さん。これが、後に思わぬ悲劇を招くことに...

翌日は5メートルの紙で吉野さんのティラノサウルスを折ることに。メンバーは、山口さん、西川さん、近江さん(テロップでは“大江”となっていた)、北條さん、田尻君、そして私。最初聞いていた話ではスタジオ内で作業することだったのですが、当日になって突然「今までロケは全部室内でしたので、今度は外で折ってください」と言い出す始末。こんな訳のわからない理由で言いぐるめられた、人の好い私たち。何が悲しくて12月の寒空の下で折り紙をしな

ければならないのでしょうか。

場所は六本木の駐車場。その日は風がとて強く、紙が捲れ上がってしまうこともしばしば。近江さんが必死に押さえてくれていたのですが、テレビに映っているのを見ると、でれーっと横たわっているだけにしか見えなかったのが、とてもおかしい(以後、近江さんは“文鎮”と揶揄さ

れることに)。やはり紙が大きいので、普通の紙では気づかないような誤差が予想外に大きく出たりと、所で苦勞をしましたが、6人で一致団結、何とか3時間ほどで完成しました。気がつけば外は真っ暗。さすがにぐったり。

12月5日にはNHKのスタジオで本番の収録があり、近江さん(会社を休んだ)と私(授業をサボった)が立ち会うことに。主な任務はティラノサウルスと折り紙ツリー(“おりがみはうず”から持ち込んだ)のセッティング。ティラノサウルスは自立しないので、天井から釣り糸(?)で支え、ウレタ

「オトナの遊び時間」

インサイドレポート

by 宮島 登



完成しての全員でのスナップ



中央が文鎮近江

ンを詰め込んで立体感を出しました。仕上がりはテレビでご覧の通り。あまりの格好よさに暫し見とれてしまうほど。

ここでは編集済みのVTRも見たいのですが、千羽鶴についての取材を受けた岡村さんのVTRがカットされていることに気づき、理由を聞いたところ、「ビョンビョンガエルで優勝しているの、また名前を出すと変だから」とのこと。なまじビョンビョンガエルで頑張ってしまったものだから、岡村さんは「古典折り紙研究家」ではなく「ビョンビョンガエル・

チャンピオン」という素敵な肩書きで登場することになったのでした... (涙)。

出演者が松尾さんに折り紙を教わる場面がありましたが、「夢中になっちゃう」「今度家でやってみる」など、それぞれに楽しんでいる様子。しかし、撮影が終了した途端、皆折り紙を放っぱりだして、とっとと帰って行ってしまいました。スタジオの撤収が進むなか、テーブルの上に寂しく放置された折り紙を見て、とても悲しい気分になった私たち2人でした...

1997年折紙探偵団

コンペションのお知らせ

「千羽鶴折形」200年記念大会となる第3回折紙探偵団コンペションの概要が固まってきた。予定は以下の通り。詳細は、順次誌上でお知らせしてゆく。

日時 1997年 8月23、24日(土、日)
時間は例年通り。

場所 近郊の大学が借りられる可能性があり、ただ今交渉中。そうなれば懸案であった講義形式の講習が聞き取りやすくなる。

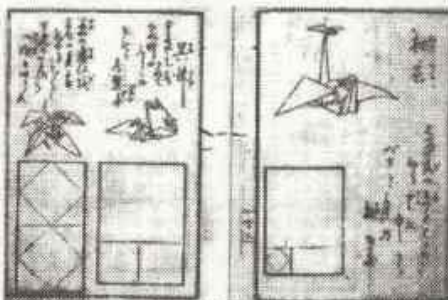
内容 「千羽鶴折形」200年を記念したイベントを企画中。
請うご期待!

「千羽鶴折形」200周年

「千羽鶴折形」は、序文によると寛政9年の新春に京都で出版されました。めでたづくめに新春ということにしたのかもしれませんので、実際に正月に売り出されたどうかは不明です。ただ、その年の8月に江戸で売り出すことを申請した文書が残っていることから、寛政9年(1797年)の発行は間違いないと言えるでしょう。そうすると今年の8月は江戸で売り出されてからちょうど200周年ということになります。実にうれしい年にめぐりあえたものと感激するばかりです。最近では、江戸ブームとやらで、

現代の行きづまりを打破するヒントを江戸時代にもとめようとする考えも盛んになっています。「千羽鶴折形」もいろいろなヒントを与えてくれます。200年の間に人間が手に入れたもの、失ったものについて考えるのも大切ではないでしょうか。

(岡村昌夫)



「吉野一生基金」より

前号でのお知らせした「吉野一生基金」へ、すでに多数の寄付金をいただきました。ありがとうございます。早くも本年の折紙探偵団コンペションへ海外作家の招待を計画できる可能性が高まってきております。さっそく、折紙探偵団1996年12月の例会において「選考委員会」を発足させ、12月28日に第一回の選考会議を行いました。

これからもご支援宜しく願います。

吉野一生さんを偲ぶ会

吉野一生さんを偲ぶ会を以下の要領で行います。生前の吉野さんの作品や人柄を愛してやまない皆さんに是非お集まりいただきたくご案内申し上げます。なお、前号でのお知らせと若干時間変更がございますのでご注意ください。

日時 2月23日(日)
13:00より17:00
場所 文京区民センター 3-A室
参加費 2,000円

式次第

1. 開会の辞
2. 吉野さんへの言葉
3. 折り紙による献花
4. 参加者全員によるティラノサウルス、トリケラトプス全身骨格の製作。
5. 閉会の辞

吉野さんの出演したVTRの上映もあります。

おりすじ

折紙ビギナー回想録

木村 哲夫

最近とみに思うのだが、何故紙を折っているのだろうか？自宅は当然として、職場、果ては車中や歩行中ですら紙を折っている。著名な作品の練習をする時もある。ふと折りたくなった対象を形にしようとする時もある。最も、あまり意識もせずに紙を広げ、気分の向くまま漠然としたイメージで紙を折る事が一番多いであろう。気が向くと紙を折っている様な気がするが、これ程になるとは自分でも意外である。

数年前、「折紙ビギナー奮戦記」というタイトルで、素人が苦勞して折紙作品を折る過程を書いたことがあった。既に周知のこととなっているが、概ね事実に基づいた内容で、自らの恥を曝したようなものである。あの中にも書いたが、折紙を始めたのは探偵団に入ったのが契機であり、伝承作品に親しんだ頃から十数年ぶりにといった状態であった。当時は折り図も読めず、折る技術も無いようなものであったし、創作折紙とい

う言葉も知らなかった。今思うと、折紙にさほど興味が無いのにもかかわらず、恐竜ネタ目当てに探偵団に入ってしまった様な感がある。

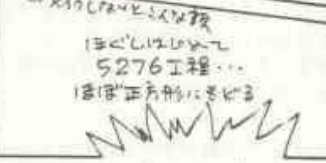
そんな状態であったが、恐竜を追ってみたい一心で挫折を繰り返しながらも、ひたすら折りまくっていた。探偵団新聞掲載作品が初めて折れた時、ちょっと大げさではあるが、達成感を感じるとともに折紙のもつ面白さに魅せられてしまったようだ。「不切一枚折り」と言ってしまうとそれまでだが、たった一枚の四角い紙が、折るという行程を経ていくに従い、形になっていく過程に驚嘆し、その過程の面白さ意かたてたようだ。

近年、自分でも作品を作るようになったが、そのときによく途中の形で楽しんでしまう事がある。偶然に現れた意外な形等は本来の過程を忘れてでも、つついっ折った広げたと遊んでしまう。そんな遊べる形に出会いたくて、紙を折っているのだろうか。

迷探偵 オリン

作：山梨雄三

折紙作家ゆうかい事件の巻



ギャラリー — おりがみはうす — 個展案内

吉野一生遺作展

一生
スーパー・コンプレックス おりがみ

2月17日(月)～4月5日(土)
10:00～18:00(日・祭定休)

■あまりにも早い別れになってしまった一生氏を偲んでの遺作展。生前、彼が製作し、友人になどに贈った、お手折りの作品をできる限り多く集めて展示。その作品群を見て、改めて氏の素晴らしいさを肌で感じられる作品展。

折紙探偵団定期例会のお知らせ

●2月の例会
2月22日(土) 予定の例会は23

日(日)に吉野一生さんを偲ぶ会が開催されますので、お休みです。

●3月の例会

3月29日(土) 13:00頃から
文京区民センター(予定)事務局
に電話で確認してください。

折り紙好きな

スタッフ募集

折り紙と触れ合う
楽しい仕事です

高卒程度 20才前後までの女性で、
折り紙と折り図に興味にある方。
初心者でもかまいません。
職種＝パソコンを使った折り図を描いて、
折り紙の書籍制作、販売、
商品企画等。
なるべく自宅通勤できる方。
委細面談。

おりがみはうす

電話 (03) 5684-6040

山口まで

発行・折紙探偵団

〒113 東京都文京区白山 1-33-8-216

ギャラリーおりがみはうす内

Phone (03) 5684-6080

発行人・西川誠司

編集人・岡村昌夫